

令和7年度 瓜破西中学校のあゆみ  
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

【成果と課題】

◆全国学力・学習状況調査

《国語》

全国平均・大阪府平均と比較し、すべての観点において平均正答率を下回った。特に、「読むこと」の分野において、大幅に平均正答率を下回る結果となった。また、正答数分布グラフによると、正答数5問と8問の生徒数が15%を超えており、正答数の高い層と低い層の二分化が起こっていることがわかる。したがって、学習に課題のある生徒に対する支援を強化するとともに、「読むこと」の分野における思考力の醸成が課題となる。

《数学》

全国平均・大阪府平均と比較し、すべての領域において平均正答率を下回った。「関数」、「データの活用」の領域では、全国平均・大阪府平均との差があまりなかったが、「数と式」、「図形」の領域では、全国平均・大阪府平均との差がかなり大きかった。文字式の作り方や計算、平行四辺形における性質を使った証明の作り方が課題となる。

《理科》

問題全体の正答数は大阪府平均より高い結果だった。特に、元素記号を記入する問題や生物を選択する問題では全国平均より高い結果だった。しかし、IRTスコアが低かった。その背景には、難問への対応力不足があると考えられる。表面的な知識の定着に偏り、思考力・判断力・表現力を問う問題への対応が課題である。

【今後に向けて】

《国語》

正答数の二分化について、学習に支援を要する生徒に対するサポートを充実させる必要がある。それに伴い、習熟度別授業の実施や家庭学習の指導の徹底が求められる。さらに、どのような学習状況の生徒においても、授業に参加し、ともに読み、考えることの楽しさを感じられるよう、自分の考えを持ち、交流し、互いの考えを認め合える授業環境も必要不可欠である。そのうえで、習慣的に文章に触れられる機会を設け、前向きに文章に向き合う姿勢を醸成したい。

《数学》

「数と式」では、文字式の文章問題においてその作り方や、計算問題の演習を繰り返したい。また「図形では」、図形の定義や定理を復習し、証明に用いる仮定が何であるかを見抜く力を養うとともに、証明を書く練習を続けていきたい。

《理科》

今回、初めてCBT(Computer Based Testing)とIRT(項目反応理論)が導入された。正答数が多くても、易しい問題での失点や難問への対応力不足がIRTスコアの低さに影響する。今後の授業では、思考力・判断力・表現力を問う問題への対応ができるように、表面的な知識の定着のみに偏らず、学んだ知識を実生活や探究活動に結びつけ、根拠をもとに説明する活動や、実験結果の考察を重視した授業を行う。